

## 平成23年度 京都府立大学地域貢献型特別研究 (ACTR) 成果

分類 番号	A10	取組 名称	大学生を対象とした食の安全・安心に関する意識調査 および食の安心感向上のための施策の検討に関する研究
研究代表者：生命環境科学研究科 准教授・川添 禎浩			
研究担当者： 京都府立大学（東 あかね、橋本香織） 外部分担者（京都府農林水産部・食の安心・安全推進課 上野俊一氏、京都文教短期大学 田中恵子氏、 京都光華女子大学 吉田 香氏）、協力者（京都府立大学生命環境学部食保健学科 忠津実希）			
主な連携機関			
京都府農林水産部・食の安心・安全推進課			
<b>【研究活動の要約】</b>			
<p>近年、食品の品質・安全に関わる事件・事故の多発もあって、食の安全に対する消費者や社会全体の関心が極めて高くなっている。食の安全の問題に関連して、消費者と行政・専門家との間で、安全に関する認識のギャップがあるのではないかとされている。原因としては、食の安全に関する教育、消費者の理解の程度、行政や専門家の対応、マスコミによる影響などが考えられる。そこで、本研究では大学生を対象に、食の安全に不安を感じるか、認識のギャップを感じるか、その要因は何か等の意識調査を行った。</p> <p>調査は京都府立大学生命環境学部食保健学科（府大）、京都光華女子大学健康科学部健康栄養学科（光華大）、京都文教短期大学食物栄養学科（文教大）の1学年に対して、2011年10月～11月の講義時間内に行った。選択式と自記式の計12項目の設問からなるアンケートを配布、回収した。回収数は府大24名、光華大86名、文教大116名の計226名であった。</p> <p>何に関心、何に不安、認識のギャップを感じるか、その要因は何かなどを分析し、食に対する安心感の向上のためにどのような情報が求められているのかを検討した。</p>			
<b>【研究活動の成果】</b>			
<p>光華大と文教大において、「規則正しい食生活」、「栄養バランスのとれた食事」を心がけている学生は「食の安全」に不安を感じている傾向にあった。不安を感じている理由は「安全であるという根拠が疑わしい」の割合が高かった。不安を感じるようになったきっかけは「インターネット・テレビ・新聞・雑誌・本等」、「学校の授業や大学の講義等」の割合が高かった。</p> <p>食の安全のために注意していることは「新鮮かどうか」、「賞味期限・消費期限を確認する」および「産地はどこか」の割合が高く、食中毒や食品添加物に対しては低かった。食の安全に関する情報源は「テレビ」、「インターネット」の割合が半数以上を占め、次に「新聞・雑誌・本」の割合が高く、信頼できる情報源もマスメディアであった。</p> <p>約60%の学生が、食の安全に関して消費者と行政・専門家との間で認識のギャップを感じたことがあると答えた。ギャップを感じた理由は「行政・専門家から発信される情報の説明がわかりにくいから」の割合が高く、次に「行政の不適切な対応が増えたから」、「行政・専門家から発信される情報が、消費者が求めている情報と異なっているから」が高かった。ギャップを縮小するために重要なことは「行政・専門家からのわかりやすい説明」の割合が高く、次に「マスメディアの役割」および「教育」となった。マスメディアの課題としては「正確な説明を行う」、効果的な教育としては「学校（小・中・高）教育」、わかりやすい説明の方法としては「リーフレットやパンフレット」の割合が高かった。</p>			

今回の意識調査から、多くの学生は食の安全に関して不安を感じ、認識のギャップを感じていることが明らかとなり、ギャップを縮小するためには、学生に対しては正確で理解しやすい説明を行うことが重要であると考えられた。以上の成果は、京都の府内産食品を含めた食に対する安心感の向上のための効果的な施策に活用できると考えられた。

**【研究成果の還元】**

平成 23 年度地域貢献型特別研究 (ACTR) 研究成果報告書資料「大学生を対象とした食の安全・安心に関する意識調査」(希望者に配布可、閲覧可)

**【お問い合わせ先】**

川添禎浩 E-mail: kawazoe@kpu.ac.jp